

大学院課程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

医系科学研究科博士課程後期・博士課程

1. 評価結果一覧

自己点検・評価単位	分析 項目 1-1-1	分析 項目 2-1-1	分析 項目 2-1-2	分析 項目 2-2-1	分析 項目 2-2-2	分析 項目 3-1-1	分析 項目 4-1-1	分析 項目 4-2-1	分析 項目 4-2-2	分析 項目 5-1-1	分析 項目 5-1-2	分析 項目 5-2-1
医系科学研究科	⑤	④	⑤	④	④	⑤	④	⑤	④	⑤	⑤	⑤

自己点検・評価単位	分析 項目 6-1-1	分析 項目 6-1-2	分析 項目 6-2-1	分析 項目 6-3-1	分析 項目 6-3-2	分析 項目 6-3-3	分析 項目 6-4-1	分析 項目 6-4-2	分析 項目 6-4-3	分析 項目 6-5-1	分析 項目 6-6-1	分析 項目 6-6-2
医系科学研究科	⑤	⑤	⑤	④	⑤	④	④	⑤	④	⑤	④	④

自己点検・評価単位	分析 項目 6-6-3	分析 項目 6-6-4	分析 項目 6-6-5	分析 項目 7-1-1	分析 項目 7-1-2	分析 項目 8-1-1	分析 項目 8-1-2
医系科学研究科	⑤	④	⑤	⑤	⑤	④	⑤

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

2. 評価結果に対する総評

大学院医系科学研究科では、医学・歯学・薬学・保健学の4分野における基盤的研究の深化と分野間の連携・融合を図り、生命医科学の急速な進歩と医療技術の高度化に迅速に対応する先端的な教育研究を推進することにより、従来以上に高度なチーム医療を担うことができる高度専門医療人を養成するとともに、旧来の学問分野の枠を超えて、複合領域や新しい領域で活躍でき、「持続可能な発展を導く科学」に貢献できる人材を養成することを目的としている。

医系科学研究科総合健康科学専攻の保健科学プログラム、薬科学プログラム、生命医療科学プログラムでは、博士課程前期につづいて、博士課程後期を設置している。また、医系科学研究科医歯薬学専攻として、医学専門プログラム、歯専門プログラム、薬学専門プログラム、放射線医科学専門プログラムの博士課程が設置されている。

総合健康科学専攻博士課程後期の令和5年度入学定員は、24名（スマートソサイエティ実践科学研究院を含めると25名）であり、各プログラムの受入人数の目安は、保健科学プログラム19名、薬科学プログラム3名、生命医療科学プログラム2名となっている。また、医歯薬学専攻博士課程の令和5年度入学定員は、97名であり、各プログラムの受入人数の目安は、医学専門プログラム60名、歯科専門プログラム27名、薬学専門プログラム3名、放射線医科学専門プログラム7名となっている。なお、博士課程後期・博士課程の入学定員充足率は111.5%となっており、適正な割合となっている。

博士課程後期では、博士課程前期で養成した人材が、更に高度で専門的な知識を得て、先端的・学際的な研究推進能力を涵養し、様々な研究領域の学際的関連分野において活躍する研究者、教育者あるいは医療従事者を養育することを目指している。博士課程では、幅広い学識と高度な研究能力を有し、学際的・国際的に活躍できる教育者・研究者や、時代の要求に応える先進的医療技術の開発・応用を担うことができる高度専門医療人の養成を目指している。それぞれの目的に沿った内容・水準の教育課程が体系的に編成されており、学生は講義、演習等を通じて様々な知識やプレゼンテーション能力を修得することが出来る。講義後のアンケートやレポートを講師にフィードバックし、意見に対する回答を講師からフィードバックすることで双方向性の関係が構築され、よりよい教育を提供することが可能となっている。常に改善を目指して、教育委員会にて定期的に更新事項を報告し、必要な事は審議し、教授会で審議、周知し共有できている。大学院生は、主指導教官、副指導教官の下で、研究を立案・実施し、博士論文を作成することで問題解決能力を身につけ、今後の研究の推進が可能な人材が育成される。博士論文の審査及び博士論文発表会での発表を経て、合格者には博士の学位が授与される。なお、個々の学位論文の審査は、3名の教員からなる審査委員会によって適正かつ厳格に行われている。

研究意欲の向上や国際的な視野を養うため研究科として大学院生の海外での学会発表支援制度を設けている。

一方、教員に関しては、研究科ではこれまで任期制又はテニユア・トラック制を採用しており、任期更新又はテニユア審査時に個々の教員の教育研究活動の成果を数値化し評価を行ってきた。これにより個々の教員の教育研究活動の質を保証し、その向上を図ってきたところである。教員の評価システムについては今後全学的な動向も踏まえ再考を要するが、何らかの形で教育研究活動の点検・評価を継続することが望ましいと考える。また、研究科において毎年複数回のFDを実施し、教員の資質向上に役

立てている。

国際化に対しては入学の手続きをオンライン化し、Webによる入学試験の実施及びオンライン授業を拡大し留学生の確保を図った。アドバンスド生命科学コースワークでは歯学部中央研究室の機器を使用して実施されており、多数の留学生が参加している。

さらに医系科学研究科では、医学、歯学、薬学及び保健学の分野を超えた横断的な活動組織として、2つの委員会（融合教育推進委員会、国際教育・協働委員会）及び5つの研究グループ（「がん・ゲノム医療」「脳・神経科学」「再生・免疫・感染・アレルギー」「老化・高齢者医療・生活習慣病・社会医学」「発生・発達・成長期医療」）を構成する学際的研究推進部会を設置している。脳・神経科学グループでは統合生命科学研究所と合同の研究発表会を実施し、研究科の枠を超えた融合を試みている。こうした活動を通じて、今後、新たな学際的・融合的な教育研究が生まれてくるものと期待している。社会のニーズに踏まえたプログラムとして、がん・ゲノム医療に欠かすことのできない遺伝カウンセラー養成コース、放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム、卓越大学院プログラムであるゲノム編集先端人材育成プログラム（メディカルコース）などの設置も行っており、様々な工夫を行っている。

医系科学研究科では教員は主たるプログラムを中心に活動するが、プログラムごとに独立しているわけではない。また研究科所属教員のみならず、原爆放射線医科学研究所・大学病院といった協力講座、寄附講座、共同研究講座、学外の連携講座も指導教員に加わっている。指導教員も主指導教員とは別の部局所属の副指導教員に指導してもらおうようにしている。このように教員はあらゆるプログラムの授業・指導・学位審査を相互に乗り入れて行なっているため研究科全体で評価を行なった。